
手紙と勿忘草

涼風 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙と勿忘草

【Zコード】

Z6011R

【作者名】

涼風 蒼

【あらすじ】

僕と彼女と出会ったのは、彼女が運営するサイトだった。メールでやり取りをしていたのが、いつしか文通へと変わり、一通の手紙とともに送られてきた勿忘草。憧れや尊敬だったはずの思いが、恋だと分かったのは、彼女と出会ってから五年目のことだった。

最初のきっかけは些細なことだつた。一次創作で活動するホームページが集まる検索エンジン。その中から彼女が運営するホムペを見つけただけ。その文章に魅了された僕は、すぐさま応援メールを出した。彼女の返信は早く、話が弾んだ僕らはいつしか頻繁に連絡を取るようになった。

メールから手紙へと変わったのは、ほんの数ヶ月前。突然、文通がしたいと彼女の方から言つてきたのだ。何の変化かは知らないけれど、僕は一言返事で了承した。しかし、彼女との文通は一ヶ月に一、二通ほどだけ。それでも、その少なさ故か、僕は手紙を大切に保管するほど大切にしている。

「　　」
鼻歌交じりにポストを覗くと、彼女から数週間ぶりの手紙が入つてあつた。その手紙の封を切り、早速中身を拝見する。

「？」
その文面に違和感を覚えた。理由は得にはない。けれど、明らかに引っかかるのだ。

「勿忘草……」

手紙と同封されていた花を見つめる。手紙にはいつもの世間話と同時にこんな文字が書かれていた。

『一緒に入めてある草は勿忘草といつて、それを煎じて飲むと、記憶を忘れないという言い伝えがあるの。けど、迷信だつて分かってるから、せめて持つていて？ そして、どうか私のことを忘れないで欲しいの』

どこか気弱な発言としか思えない文面。けれど、彼女の住所を尋ねるような勇気はなく、僕は彼女の言つ通り、その花を押花にして

肌身離さず持っていた。

そんな淡い青春はあつという間に過ぎてしまった。けれど、彼女のあの文面は忘れられずにいたのだ。そして、あの手紙を最後に、彼女からの返信はこなかつた。メールをしてみても返信は来ず、サイトは閉鎖されていた。彼女との通信手段は全て断たれたかのように思えた。

しかし今、大切に保管していた手紙の住所を片手に、その家へと押しかけている。昔の自分にはなかつた行動力と勇気を振り絞り、彼女の家までたどり着けはした。僕は意を決して呼び鈴を鳴らす。

「どなたですか？」

しわがれた声とともに出てきたのは、かなりの老婦だった。背中が丸いのも拍車をかけているのか、小人のようだった。

「あの……一之瀬透さんはご在宅でしょうか？」

そう尋ねると、老婦は怪訝そうな顔で僕を見てくる。僕は、何とか老婦の疑心を取り去ろうと、手紙を見せた。

「実は、一之瀬さんとは文通でのお友達で、彼女から返事が来なくなつたので、何かあつたのかな、と……」

元々口下手な性格なせいか、僕の声は段々と小さくしぶんしていく。今更家に押ししかけてきた自分に後悔し始めた。しかし、老婦は何か思い出すと、僕を見つめてきた。

「もしかして……瀬野隆志、さん？」

「あ、はい。そうです」

「やつぱり！ あの子が言つてた瀬野さんだつたのですね」

「あ、はあ……」

嬉しそうに話す老婦に、今度は僕のほうが困惑した。その表情に気づいたのか、老婦は恥ずかしそうに顔を少し赤らめ、姿勢を正した。

「申し遅れました。私は透の母の美都子といいます。娘が貴方の話をよくしていました」

「そなんですか……何だか、恥ずかしいな」

顔が赤くなるのを感じ、少し顔を他所へと向ける。

「立ち話もなんですから、中にお入りください」

「ありがとうございます」

一礼し、家の中へとお邪魔する。居間に座られ、彼女の母美都子さんは奥へと行ってしまった。

心が忙しく動いている。その鼓動を落ち着かせようと室内をぐるりと見回したが、余計に落ち着かなくなつた。そわそわとしている僕のもとに、美都子さんが戻ってきた。

「遅れてしまふません。実は娘から、この手紙を預かっていまして」
そう言って僕にスッと差し出してくれる。それを受け取ると、封筒を見つめた。表には僕の名前しか書かれていない。簡素な白い封筒。

「中身を拝見させていただきます」

一言断りをいれ、封を切つていぐ。中から一枚の手紙が出てきた。その手紙を目で追つていぐ。

『もし、貴方がこの手紙を読むとき、私は既になくなつているでしょう』

衝撃的な一文の始まりから、僕はサッと顔を上げた。美都子さんの目頭に涙が浮かんでる。そう、彼女は既に亡くなつてしまつたのだ。再び手紙に目を向ける。

『貴方と文通できた約一年間。とても励みになりました。貴方と文通がしたい、といい始めたのは、私が病院に入院してしまつたのです。私は肺臓癌を患つていました。何度か貴方にも理由を話そうと思い、書こうとしましたが、結局、こんな形でしか真実をかけませんでした。けれど、貴方は何も聞かずに入承してくれました。その事が、凄く嬉しかつたです。闘病生活は厳しく、辛いものでしたが、貴方との文通が唯一の励みでした。貴方の手紙がいつも待ち遠しく

て、次の手紙を読むために頑張っていました。けれど、死期が近付いたことも分かつていました。この手紙は、貴方の手元に行くかどうかは分かりません。でも、もしこの手紙を受け取つてくださつたら、最後に私からの我儘を聞いていただきたいです。前の手紙で送つた勿忘草。どうか、それを私だと思つて大切にしてください。貴方の心の隅に、私を生かしてください。私という存在は消えてしまいますが、貴方の心の隅に置いてくださるなら、私の心は生き続けます。どうか、私の我儘を聞いてください』

手紙の文面は、そこで切れていた。僕は懐から、押花をした勿忘草を取り出した。

「この勿忘草は、貴女が僕にくれた大切なものです。忘れるはずないじやないですか……貴女を忘れることなんてできない……」

勿忘草と手紙を握りしめ、一粒の涙が頬を伝つた。

「ありがとうございます、瀬野さん。文通でしか知らない娘を、そこまで大切に思つてくださいって」

「いえ、僕のほうこそ、この手紙を渡してくださつてありがとうございます。この手紙、もらつてもよろしいでしょうか？」

「もちろんよ。どうか、大切にしてやってください」

「ありがとうございます」

深く頭を下げる。泣いている顔を隠すためもあるが、何より、そうしないと見つとも無く泣き崩れそうだった。

愛娘を失つた母親。自分が訪れたことで、その傷を触つてしまつただろうに、この人は向き合つてくれたのだ。その心と手紙に感謝の意を示して、僕は暫く頭を上げなかつた。

家を出る前に、彼女に線香を上げて手を合わせる。そして、心の中で言うのだ。

一生私の中でき生きてください、と。

自分とともに生き続けてください、と。

自分の家へと戻ると、早速その手紙を保管している場所へと入れ

る。小さな玩具の金庫だが、それでも役目を十二分に果たしてくれているのだ。鍵をかけ、それを机の引き出しの中へとしまった。机の上に置いた勿忘草を見つめ、僕は彼女との思い出にふけっていく。それは、文通でしか知らない相手。しかし、その手紙の一文一文に、彼女の動作が目に浮かぶ。それを漸く恋だと自覚したのは、彼女と知り合ってから有に五年の歳月が経っていた。

THE END

(後書き)

文芸部の部誌で書いた物語です。私にしては珍しい恋愛物のです。しかし、まあ、私が書く恋愛ものは、どうしても恋恋になつちやつのですが……（・・・）

こんな話ですが、暇潰しにでもなれたのなら幸いです！

ソノメで読んでください、ありがと「ソノメ」もしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6011r/>

手紙と勿忘草

2011年3月14日15時40分発行